

有明
高専

図書館報

平成8年12月 ● 第2号



特集・座談会「図書館へ行こう」 2・3

読書感想文コンクール 4~11

入賞者、審査委員 4

入賞作品紹介 5~9

審査を終えて 10

推薦図書 11

も

全国図書館大会報告 11

<

図書館統計 12・13

じ

図書館勤務17年の思い出 14

INFOMATION、スタッフ紹介 15

郷土の文化財、編集後記 16



座談会「図書館へ行こう」

出席者 図書委員（「図書館俱楽部」編集委員）

内村 香（4C） 橋口 悟（3E） 西原 佐知（3I） 森木 史子（2A）

長尾 一也（1M） 西田 智美（1C） 原田由加里（1C）

焼山 廣志（顧問）

司会 新谷 肇一（図書館長）

司会 皆さん、こんにちは。本日は、図書委員の中で「図書館俱楽部」の編集に携わっている学生諸君に、日頃の活動を含めて、本校の図書館についていろいろと語ってもらいたいと思い集まつてもらいました。皆さんの手によって定期的に発行される「図書館俱楽部」のお陰で、図書館のさまざまな案内とともに新着図書の紹介などで、学生、教職員は大いに助けられています。本日はざくばらんに日頃の苦労話や図書館への思い、要望について語っていただきたいと思います。まず、「図書館俱楽部」の編集をやるようになった動機などからどうぞ。



内村 図書委員の手による「図書館俱楽部」が発刊されてから、今年で6年目になると思いますが、私が入学した頃の図書館は、何か閉鎖的な感じがありました。もっと開放的な図書館にしたいという気持ちから図書委員になりました。入学した頃に比べて、新刊図書も入るよう

になり、最近は図書館の利用がデータ的にも増えてきているので嬉しくなります。

橋口 確かに最近は、図書館のカウンターに置かれている新刊図書が、ほとんどなくなっていて、多くの本が借り出されているのを見ると嬉しくなります。また、それらを見ていると、どういう本が良く読まれているのか傾向がつかめ、私たち図書委員がブックハンティングする際に役立ちます。入学した頃に比べて、新刊図書が増えましたね。

司会 学生が希望図書を申し込むのがまだ少ないようですが。そこで、君たちが、年に2回、ブックハンティングをして本を選んでくる活動がよい効果を上げていますね。

橋口 私自身、最初の頃は希望図書の制度を知りませんでした。どうしたら希望の図書が入るのかを、学生の中にはまだ知らない人が多いようです。それだけではなく、夜



間開館していることや何時まで開館しているのかを知らない人もいます。そういう意味で「図書館俱楽部」という広報誌が広報活動の面で大きな役割を果たしていると思います。

焼山 最近の「図書館俱楽部」は、学生の間でよく読まれているなという感じがして嬉しいです。教室の中で、捨てられているのをあまり見ないし、教科書やノートの間に挟まれているのを見かけるからです。最初の頃は、やや啓蒙的な感じがしていましたが、最近は、学生に対する情報提供に重点を移して、例えば新刊図書の概要を紹介するのを、年に何回か特集で組んだりしているのが効を奏しているのだと思います。

司会 今年はブックディテクションも設置され、図書館も変わりつつありますが、皆さんの印象はいかがですか。

内村 確かに、図書館の入り口まわりが明るく開放的になりましたね。それに、雑誌を読むスペースが広くなり、読みやすくなりました。しかし、奥に行くと暗い感じがして、夜はあまり行きたくないかもしれません。全体的に照明が暗いと思います。それに、スチールの書架は冷たい感じがするし、書架が高すぎて閉鎖的な感じがします。

司会 最近の地域の図書館は、周囲の壁付き書架以外は木製の低書架が配置され、部屋全体が見通せて明るく、開放的なところが多くなりましたね。

橋口 図書館の玄関に入ったロビーが暗くて、床のカーペット等も色あせて、古くさい印象がします。明るい快適なロビーにしてほしいですね。

司会 ロビーのことは多くの人が指摘していることで、

あれだけ広い空間が有効に活用されていないのはもったいないことだと思います。現在、改善計画を進めていますが、教職員サイドの図書運営委員会としては、学生のたまり場になり得るような、ティーラウンジ的な空間にしたいと考えています。



森木 ティーラウンジにするというのは賛成です。この学校には、学生がゆっくりくつろげる場所がほとんどありませんから。ところで、今までロビーに置いてあった新聞閲覧台がなくなり、2階の雑誌コーナーに新聞が置かれているのを知らない学生が多いですね。新聞閲覧台がなくなり、新聞がなくなったと思っているようです。

司会 新聞閲覧台がロビーのかなりの部分を占めていましたので、新聞はケースに入れて2階の雑誌コーナーに置くことにしました。当面、ロビーには大きなテーブルを5つ置いて、4~5人のグループで勉強できるスペースに変更しました。比較的よく利用されていますが、新聞閲覧スペースが変更したことの広報が必要ですね。そのほかに、図書館を利用して、何か困ったことや要望はありますか。

原田 コンピューターによる図書検索がうまくいかないことが時々あります。例えば、図書館に必ずあるとわかっている本をマニュアル通りに入力しても、「該当しない」と応答することがあるからです。また、ローマ字入力がしにくいのも使い勝手が悪いように思えます。



西田 古い本がたくさん置いてありますが、ほとんど読まれていませんね。また、有名な作家の短編を読もうと思っても、全集ものしか置かれていないことが多く、大きな本では借りる気がしなくなります。もっと学生が読みやすい配慮が要るのではないでしょうか。



焼山 この学校の図書館には、文学関係では全集ものがよく揃っています。文学部を持つ短大でもとてもあそこまで揃えられていません。研究する上では優れていると思います。

ます。西田君の発言も一理ありますが、一方で図書館は個人ではなかなか揃えられない本を集めておくというのも大事なことだと思います。

西原 新刊本など、一度借り出されるとなかなか返却されませんので、せっかく借りに行つても貸し出し中ということが多く、人気のある本は数冊入れて置いてほしいと思います。とにかく、新刊本はすぐに借り出されます。一方、極端に古い本がまだ並べられており、百科事典など30年前のがあったりして、アンバランスな感じがします。



長尾 学生の中には、まだ借り方かわからないといって、せっかく図書館にあるのに自分で本を買ったという人もいます。また、貸し出しカードを紛失したので、それ以後、図書館を利用していない人も多いようです。貸し出しカードの再発行も考えてもらう必要があります。



内村 それから、学生自身にも、もっと図書館の利用の仕方やマナーを指導する必要がありますね。図書館の中で大声でしゃべったり、走り回ったり、ものを食べたりしている学生もいるようですから。それから、図書館に是非、コピー機を入れてほしいですね。

司会 本日は貴重なご意見ありがとうございました。出されたご意見を今後の運営の中で生かしていきたいと思います。最後に、図書館俱楽部の今後の抱負をお願いします。

橋口 各クラスの図書委員との結びつきを強めたいと思います。特に、4・5年生の協力が少ないので、それを改善するために、図書委員の委員長・副委員長を今迄3年生であったのを、4・5年生から選出したいと思っています。また、今年新たに「図書館俱楽部」編集用にパソコンを入れてもらいましたので、旧機種からの移行作業を行っていますが、きちんと後輩につなげていきたいと思っています。それから、「卒業特集号」が好評ですが、今後、「入学特集号」も考えていきたいと思っています。

司会 今後の活動を大いに期待するとともに私どもその活動を支援していきたいと思います。本日は、長時間ご討議いただき誠にありがとうございました。

読書感想文コンクール

数年間途絶えていた読書感想文コンクールが昨年から復活され、今年で2回目を迎えました。

図書館運営委員および国語科をはじめ一般科目の先生方の協力を得て、このコンクールを実施できました。応募総数は昨年よりやや下回りましたが、370編が集まりました。今年は担任の先生にも努力して頂きましたが、3年生以上の応募がやはり少なかったのが残念です。次回は上級生も積極的に応募してほしいものです。

担任教官による第1次審査で、まず88編が選ばれ、下記の7名の審査委員による第3次審査で、最終秀作1編、優秀作3編を含む入賞作品10編が選ばされました。入賞作は数に限りがありますので、やむなく選に漏れた作品もありました。審査講評で焼山先生も述べられていますが、入賞作品のみならず惜しくも選外となつた作品も含めてなかなか読み応えのある秀作が多く、感動を覚えました。入賞

された学生はもちろん、参加したみんなに心から拍手を送ります。感動を与えてくれてありがとうございます。

皆さんの感想文を読ませていただき、改めて本の読み方にはいろいろなことがあることを思い知らされました。同じ本を読んでも、感動の箇所や仕方はまちまちであり、その本の主題さえ、読む人のこれまでの生活体験や読書力、創造力の違いで異なってくることを示しています。何度も読み返しながら、活字の奥にあるものを探り、作者の作品意図に迫るのも読書の喜びの一つだと思います。

感想文を書くことは、この本を読む力に加えて、いかにそれを文章として表現するかという書く力も必要になりますので、たいへんだと思いますが、このようなコンクールに参加することによって、感受性、想像力、思考力、文章構成力を培ってほしいと思います。

(図書館長 新谷 肇一)

入賞者

最優秀賞

2年 建築学科 坂上 美穂 「晩年の子供」を読み

優秀賞

1年 建築学科 吉富 寛子 「野菊の墓」を読んで

2年 物質工学科 江崎奈都子 「アンネの日記」

2年 建築学科 前岡いつみ 「光抱く友よ」を読んで

佳作

1年 電気工学科 森山 星児 「風立ちぬ」

1年 建築学科 真弓 弘之 「鼻」を読み終えて

2年 電子情報工学科 宮崎 尊秀 「黒い雨」を読んで

2年 建築学科 大戸 奏子 「鼻」を読んで

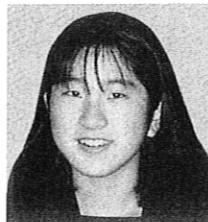
2年 建築学科 溝口 直美 「見知らぬわが町」を読んで

2年 建築学科 森木 史子 「友情」を読んで

審査委員

一般科目	国語(運営委員)	焼山 廣志
	国語	岩本 晃代
	英語	中本 潔
	歴史	高田 実
専門学科	電子情報工学科(運営委員)	森 紳太朗
"	物質工学科(運営委員)	三浦 博史
"	建築学科(図書館長)	新谷 肇一

入賞作品



「晩年の子供」 を読み

2年 建築学科
坂上 美穂

この本を手にする前の自分に振り返る。それは、「子供」という二文字に大きくゆさぶられ、今いる現状の中で、「もう私は、子供ではない。」と背伸びした様に、自分自身、誇らしげに読んでいく。

しかし、大人に成り済ますのは難しかった。すでに、晩年という言葉に、つまずいていたのだった。私は、あわてて辞書を開く。そこには、「一生の終わりの時期」と記され、まるで自分は、知っていたかのように早々と本に目を向けた。

そこには、私より七つ少ない女の子が主人公として、晩年を描く。いかにも、おおげさで性格的にも、私とはまるつきり違う子供であった。私はこの子に対して着々と、苦手意識が、大きくなるのを感じた。

人前で、好き嫌いを白黒はっきりさせることは、私にとっては不可能な事だった。それに、何より一人でいることを好む、この子が分からなかった。しかし、犬に噛まれた時、何事もなかったかのように他の人に振る舞ったのは、正直言って疑った。この犬が、噛んだことを機に、立場が悪くなるのを恐れたと言うのだ。今まで、このような感情など一つも見せなかつたこの子に対し、私の見方はここから変わっていった。

テレビの漫画で、狂犬病のことを知るこの子は、自分の思い込みで、晩年期を作りだして行く。その不安とは、大人では味わえない子供の心と思える。私はやはり子供であった。その晩年期を、大人なら笑うかもしれないものの、私は、一緒になって不安を味わった。どうしようもなく、淋しくて、つらくて…。

しかし、この気持ちがまだ味わえることができて、少し安心した。子供から大人になることは、すべて自分が変わってしまうと考えると切ない気がしてならない。背伸びする必要もなければ、焦ることもない。ゆっくり大人へ、近づきたい。この女の子も、最後は、自分の思い込みにあきれるのであるが…。

そう、子供は一つ一つ階段を踏み締めて、大人へとなつて行くのだ。最後に私なら、晩年をこう訳そう、それは、子供でも大人でも「一生の始まりの時期」として、これからが勝負だと自分に言い聞かせるはどうだろうか。

この本を読み、我に振り返ると、まだまだ大人では未熟な箇所が限りなくある。しかし、まだ子供でいたい気も確

かにある。これらがうまく組み合って、すばらしい人間として生きていければ、と願う。

そう、この子と一緒に。



「野菊の墓」を 読んで

1年 建築学科
吉富 寛子

人間の愚かな心には人間らしい心も存在している。私が、野菊の墓を読み終えて感じたことだった。この話は一見どこにでもありそうな話だと思う。しかし人が生きていくうえで大切な心というものを改めて思いおこさせられた気がした。

人の愚かな心を私に強く印象づけたのは政夫や彼の母、そして清純な民子と彼女と政夫の恋愛を傷つけたお増達の涙である。民子が還えらぬ人となった時、多くの人が民子を思って涙を流した。悲しみに後悔にそして自分に腹を立てた涙。それならばなぜ民子に二人の恋に思いやりの心を持たなかつたのか、幸せを見守ってやらなかつたのだろう。この時、人の心は大部分が醜い愚かな心がしめていると思った。この人達の流している涙は意味がないと。民子を政夫からひき離し顔も知らない人との結婚をすすめた彼の母の許しを求めて流す涙を、この時私は後悔という馬鹿げた心の表れとしか感じることができなかつた。

しかし次に私は、ほほえましくらいゆつたりとした心を与えてくれた政夫の心を見つけた。醜い心の反面、美しい心、つまり人間らしい心。本当にこの物語はどこにでもありそうなそんな恋愛である。でも私達の現実よりほんの少し幻想的であり、また理想も込められている。政夫には男らしい野性味が全くみられない。民子を一人残して去っていく。本当に強い人ならば二人で愛を貰いだろう。政夫はできなかつた。でも私はここに人間らしい心が表れていると思う。— 心では民さんと離れたくない。— 政夫が残した民子あての手紙の一言である。今まで弱い人ときめつけていた私はまちがいに気づいた。だれにだって自分にはどうしても動かせないこと、できないことがある。心ではどう考えても。だからこそ弱い中にも政夫の人らしさのある心を見つけることができたのだ。さらに、私はこの話を読んでいて一番心をゆり動かされた一言に出会つた。それは、政夫への思いを胸に秘め、まさに自分の死を悟った時の民子の一言だ。ありがとうございます。とてもまねはできない民子の心の美しさがあつた。

二つの心は対照的である。でもよく考えると似ている事に気づく。後悔の涙。人だからあの時あんな事をしなければと悔やむことができる。そして人は少しずつ成長していくのかもしれない。みんなを許した民子と政夫は、きっと人の愚かな心の内にも人らしい心を見つけたに違いない。私は愚かな心があるのと同じくらいに温かい人らしい心もきっとあるのだと二人に教えてもらった。ただ、その心をみるのは心がきれいな人でなくては難しいだけなのかもしれない。

民さんは野菊のような人だと政夫はいった。政夫さんはりんどうのようだと民子はいった。二人は今でも清らかな心のまま野山に咲いているに違いない。



「アンネの日記」

2年 物質工学科
江崎 奈都子

「親愛なるキティーへ」で始まるアンネの日記。ナチスにおびえながらも、日記を書き続けたアンネ。この日記からは、その少女の気持ちがまっすぐに伝わってくる。

ナチスのユダヤ人迫害がひどくなると、アンネは隠れ部屋に移り住んだ。そしてもう二度と外へは出られなくなつた。それをアンネは、言葉を発すことができないのと同じくらい苦しいと表現した。当たり前のよう外を歩いている私達には考えられないほど息苦しいことなのだと思う。

隠れ部屋での生活は、夜は電気をつけることも話すことも思うようにはできず、とても苦しかったはずだ。しかし苦しいばかりではなかったと思う。アンネはアンネなりにこの生活を楽しんでいたのかもしれない。なぜなら彼女は、おじさんが言ったシャレまでも、まめに日記に書いていたのだから。

話しの合わない母をアンネは嫌がっていたようだが、父は良き理解者として尊敬していた。そんなある日の日記にとてもおもしろいことが書いてあった。「おばさんたら、やたら父に色仕掛をして大嫌い。」日記の中では、みんなに我慢強いアンネが、小さな子供みたいにおばさんに嫉妬心を持つのがとてもかわいく思えた。隠れ部屋での生活では、自分勝手は許されないし、いつ発見され収容されるか分からぬ生活は、常に気が張りつめていて、緊張した状態だったと思う。同居している人との意見の食い違いがあつてもわがままを言って人を困らせなかつたアンネは偉いと思う。

アンネの日記は1944年8月1日でとぎれている。その日、アンネ達はアウシュビッツの収容所に収容された。でもアンネの日記はアンネの心の中でその後も続いていたと

思う。だがそれは決して昔のように笑うこともなく、誰かに言うことも見せることもなかつた。

アンネの日記を通して、たくさん考える事があった。その中で最も考えさせられたのは、やはり平和についてだつた。ナチスが行っていたことは、前に調べていたので知つていたが、改めてナチスの残酷ぶりに胸を締め付けられた。しかしそれに似たような事を昔、日本も中国や朝鮮に対し行っていた。そのためにどのくらいの人達がアンネのように眠れない夜を迎、さみしく述べをしたのだろう。私達は、もっと多くの事を知るべきだと思う。そして考えるべきだ。もう二度と同じ事を繰り返さないためにも。今でもこの世界のどこかで、死と向かい合つた生活をしている人がたくさんいる。少しの食糧で、やつと命をつなぎとめ、明日に向かえきれない骨と皮だけの人達が。そんな人達にも夢があるはずだ。その人達の夢が叶うためにも世界の平和を願う。すべての人々が、もう二度と眠れぬ夜やさみしい想いをしなくてすむような世界を。それはアンネの願いでもあると思う。



「光抱く友よ」を 読んで

2年 建築学科
前岡 いづみ

はじめのこの本の印象は、題から、よくありがちな感動的な友情ものだと思っていた。しかし実際は全く異なつていて。もっと現実的で人間臭いというか、生臭い感じで、今まで読んだことのない友情ものだったので、とても新鮮だった。

そんな中で私は深く考えさせられ、印象に残つたことがあつた。

まず、私は勝美の強さにすごく魅かれた。アル中の母親をかかえ、彼女から発せられるつらい言葉、自分を信じてくれない教師、世間の冷たい目。それらにも負けない彼女の強さとは何だろうと思った。きっとそれは、彼女がこんなにつらい想いをするのは母親に主な原因があり、憎んでもおかしくないと思うのに、そんな母親だけれど、勝美は母親に愛情をもっているからだと思う。そして自分が母親を守ろうとしているからだと思う。私は、こんな母親に…と思う。しかし守ろうとするものがあるから頑張れて、強くいられるのだと思う。

もう一つは涼子の気持ちについてである。皆がはれものに触れるかのように接し、避けていた不良の勝美に対し、涼子はあたたかく接した。こんな、誰にでも優しい気持ちで接する涼子を見習いたいくらいだった。でもやはり友達の目を気にする気持ちは涼子にもあったので、何だか安心

した。そして涼子の、「うちはなんぞ松尾さんみたいな皆がよく言わんひとに近づいたんか、自分でも分からん。ただ松尾さんは、これまでの17年間、うちの心がきちんと片づいたところを引っくり返したんよ。何が上等で何が下らないか、何が正しくて何が間違っているか、わからんようになってしまった。」という言葉には、理屈ではない、すごく共感出来るものがあった。同じようなことが私にもよくあるし、同じようなことを考えたりするので、涼子の気持ちがよく分かる。何だか私の気持ちを代弁してくれたようで嬉しかった。

この話を読んで、涼子も勝美も、私も、何だかとても不器用だなと思った。まだ要領よくなにもできない、自分の考えていること、思っていることさえ分からなくなったりして、試行錯誤している感じだと思った。私自身、まだ必死でもがいている感じだ。でも、将来その状態から抜け出せた時、皆が言う「おとな」になれるのかなと思う。それは、いつになるのか分からないけれど、その時まで頑張ってみようと思う。



「風立ちぬ」

1年 電気工学科
森山 星児

私は「風立ちぬ」を読んだとき、不思議な感動を覚えた。ある本で、人間の愛情は、死の危険にさらされている時が、一番美しいと書いてあったのを思い出した。その時はその言葉に賛成できなかったが、これを読んだ後なら、なんとなく納得できた。なんと美しい二人の愛なのだろうと思つた。

だが、私は途中で、節子が最後にはどうなってしまうのかがわかつて、極めて美しく、幸福な状況を想像させる場面であっても、自分でも節子を抱きしめたくなる程、切なく感じられた。生への執着は、いつか自分が死んでしまうのを、本能的に知っているからに他ならない。

私も、最近になって、ひどく幼い頃を懐かしく思うことがある。「ああ、私はあんなにも幸せだったのか」と思う。だが、幼い頃への執着のようなこの感情に気付いた時、まるで違う、自分がこの世の人ではなくなったような寂しさになる。もう二度とあの頃は戻ってこない。例え、同じ場面を繰り返せたとしても、同じ感動を味わえる保証もない。この二人は、やはり本能的にそれを知っていたのだろう。だからこそ、思い出として後から思い出しても、この頃の幸せが美しくあるよう、今をお互いに美しく幸福でいようとしたのだと思う。

同じ感動を、何回も味わうことができるのは思い出も

同じである。だから堀辰雄は、その感動を長く残すため、矢野綾子との生活を、もっと形のあるものとしておく必要があったのだろう。実際、当の二人は他界してしまったが、あの頃の生活は今でも無価値ではない。「風立ちぬ」を読むたび、二人のサナトリウムでの感動の日々が蘇る。幸せと切なさ、悲しさが一体となった気持ちも。そして、すすきの生い茂った草原での、風の心地良ささえも。

主人公である堀辰雄は、彼女が亡くなった後、幸せでいらっしゃるだろうか。彼女との生活は本当に幸せだったのだろうか。それはどうだろう。べつに知りたくもない。思い出は焦らない方が美しい。だが忘ることはできない。彼女はどうだったろうか。死ぬ瞬間まで幸せだったんだろうか。男が散歩からなかなか帰らない時、ひどく不安になって恐怖感さえ持つこともあった。だが、それでも幸せだったんだろうか。いや、幸せだったんだろう。私はそう信じたい。そうでなくては救われない。

これは間うまでもないことだったように思う。二人はきっと幸せだったに違いない。二人がそう思えば、それは本当にそうなのだから。



「鼻」を 読み終えて

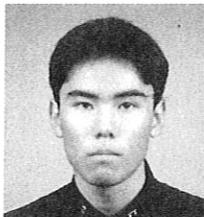
1年 建築学科
真弓 弘之

僕は50作品もある推薦図書の中で、芥川龍之介が書いた「鼻」という作品を選んだ。この作品について書くと決心した背景には、本に書かれてあった内容と現代を生きる若者との間に、なにか同じような共通点があるような気がしたからであった。

作品の主人公は禪智内供。禪智内供は人の数倍もある長い鼻を持っていた、というかぶらさげていたといった方がいいのかもしれない。そのせいか、寺を訪れる人々は禪智内供の長い鼻を見ては、くすぐすと笑うのであった。もちろん禪智内供も笑われてうれしいはずはない。常に影では、鼻の短くなる方法をいくつもいくつも試していた。つまり、ごく普通の人が持っているような短い鼻が、禪智内供も欲しかったのである。このような点が僕には現代の若者と一致して見えたのである。大部分の人は常に、心の中では理想を描きながら生きている。私もああいうふうになりたいとか、もしこの様になればいいな、といったようなことである。そしてその理想に向かって、人間はいろいろなことを試みる。きれいに見せるために化粧をしたり、やせたいという一心でダイエットをしたり、髪型をかえたり…。自分から見れば理想通りだ、と満足感でいっぱいなのかもしれない。しかしもとの姿を知っている人から見れば、今度

はこっちで物足りないような心もちがするものである。「鼻」の主人公である禅智内供も、常人とは異なる長い鼻を気に病み、常人と同じ鼻にしようと努力してついにそれを実現するが、人々の笑いがよけいにひどくなつたので、もとの異常な鼻に戻してほつとする。不純性を認めざるを得ない人間のあり方が「鼻」という作品の中から読みとれた。

人をかえる最大のきっかけはコンプレックスにあると思う。理想やコンプレックスを抱きながら生きていくということは、非常に大切なことである。しかし度を超てしまえば何にもならない。なぜなら自分だけしか持っていない個性がなくなってしまうからである。人間は素が一番である。しかしそれよりは、自分の個性に多少の理想やコンプレックスを加えた人間の姿の方が、より立派な人間の姿なのではないだろうか。



「黒い雨」を 読んで

2年 電子情報工学科
宮崎 尊秀

この本を読んで、以前、長崎の原爆資料館で見た写真や遺品の数々を思い出した。まさにこの本は、実際の被爆の様子をありのまま書いたものだといえる。原子爆弾が落ちて一瞬で焼け野原になった広島の町や、焼死した人、背中が火傷で肉が見えている人、死体のそばで泣いている人などの写真を思い出して読んだ。閃光によって一瞬のうちに即死してしまった人もむごいが、かろうじて生き残り火傷や原爆症で苦しみながら満足に治療もできず死んでいった人はもっとむごいと思う。また、爆弾で身内や家族を亡くした人はどんなにつらいだろうか。逆に、死んだと思っていた身内や家族に生きて再会できたらどんなに嬉しいだろうか。

ぼくはこの話にててくる人々を、精神的に強い人だと思う。戦時中とはいえ、川に死体が浮かびあがり、爆死体があふれ、死体が次々と焼かれしていく光景は、ぼくには直視できないだろう。それにこんな悲惨な状況では生きる気力を失ってしまうのではないかだろうか。現在とは生活様式がまるで違う時代で、互いに助け合い思いやりの人々が多いのに感動した。その中でも、原爆病をわずらい重松夫妻に遠慮し症状を隠し続け、縁談の話を先方に断り病気の苦しみと将来の不安を背負った矢須子は、いちばんかわいそうな被害者だと思う。

このような悲惨なことがおこっても戦争をやめようとしない国家は、殺された人々を降伏を認めさせるためのみせしめとしか思わなかつたのだろうか。この本でいちばん印

象に残った文章「戦争はいやだ。勝敗はどちらでもいい。早く済みさえすればいい。いわゆる正義の戦争よりも不正義の平和の方がいい。」という重松の思想を、自分が被爆したり、家族や身内を亡くした人は、口には出さずともだれでも心の中でそう思っていると思う。悲惨さを知っていても、現実に苦しみを肌身に受けない人達が、戦争をやめないのでと思う。

原爆の投下が戦争終結のために正しかろうがそうでなかろうが、罪なき市民が負った苦しみや悲しみをわかり、戦争の残酷さや核兵器のおそろしさを十分反省することが大切だ。そしてそういう過去の悲劇のうえに我々は今、平和に暮らしていられるのを忘れてはならない。



「鼻」を読んで

2年 建築学科
大戸 奏子

人は、どうしても見られる事を気にしてしまう。だが、生まれつき親からもらった体を変えようとするのは愚かな事だ。自分がどんなに欠点だから可笑しいと思っていても、他人はそんなに気にかけてはいない。

そう頭ではわかっていても、誰だって自分の欠点ばかりが目に付いて気にしているだろう。どうにかして人並に良くならないかと考え、変えようとする。私も体では気にしている所はたくさんあるので、一人で色々と考え込むが、やはり外見を気にする事よりも、自分自身の中身についてもっと気にした方がよいのだ、と思った。欠点が気になりすぎて自分の事しか見ていない人より、周りに対する思いやりを持ったの方ならば、例え滑稽な特徴があったとしても、影で悪口を言ったり、馬鹿にしたりする人はいないと思う。自分がどれだけ周囲に対して気持ちよく振る舞うかによって他人の目は決まるものだ。

人は他人の美点は無条件で褒めるが、その人を良く思っていないからしたら妬みもあるだろう。他人に良く思われたい、と願うならば、まず自分の事ばかり考えるのではなく、他人の事を思いやってみてはどうか。不器用な人でも、相手を思いやる心というのは伝わると思う。他人の目は外見で判断されるものではないし、そうされてはならない。人の内面の良さというものは、言動や行動の一つ一つに、にじみ出てくる。それを感じた人を、悪く思つたりする人はいないのではないか。

この作品では、自己満足を得る為に何かを変えたりするより大切な事の方に目を向けると考えさせられた。そして、きまぐれな世間の目に対応できる要領の良さと、愛嬌も身に付けておこうかな、と思った。一つの事に拘って、

立ち止まつていてはいけないのだ。前向きに考えていく事で自分の未来も開けていく筈である。



「見知らぬわが町」 を読んで

2年 建築学科
溝口直美

私の住んでいる大牟田が、かつて炭鉱で栄えていたことは知っていた。名称は知らなかったが、「ヤグラ」も見たことがあった。しかし、それについて深く考えたことはない。図書館へ行つても、郷土史のコーナーはほとんど見ない。17年間住んでいて、私は大牟田の何を見てきたのだろう。大牟田についてどれだけ知っているのだろう。

私はこの本を読んで、昔、大牟田で囚人の強制労働が行われていたことを知った。12時間労働で、坑内に入れば食事もできないという毎日を、囚人たちはどんな思いで過ごしたのだろう。空気が悪いので、多くは呼吸器系の病気かかり、死亡者の割合は北海道に対して3.3倍だったという。作者が後に書いていたように、まさに生き地獄である。また、与論島からの移民を低賃金で雇うなど、差別的に扱つたりもしていた。大牟田の炭鉱の繁栄の裏にこんなことがあったことを知り、私はとても複雑な気持ちになった。

「燃える思いは堅坑ヤグラ、赤い夕陽にくるくると」この本に書かれていた、聞いたこともないフレーズが、なぜか忘れられない。囚人や坑夫たちの様々な思いとともにまわっていたであろう堅坑ヤグラ。いくつかあるこれらの堅坑ヤグラも、埋め立てられたり、公園になつたりしている。そして、四ツ山第一堅坑が爆破によって取り壊された。その場面をテレビで見た私は、この本で少しほんの知識がついていたためかとても悲しくなった。かつて炭鉱で働いていた坑夫の方々のため息のようなものが、私の心に強く残った。三池炭鉱とともに歩んできた彼らは、彼らの思い出というか、人生というか、そういうものまでもヤグラと一緒に壊されてしまったかのようだった。

炭鉱が衰退した現在、私はそれに興味も示さず、むしろ汚れたイメージで、あまり良くは思ってはいなかった。しかし、私の住む大牟田には、炭鉱とともに生きてきたたくさんの人々がいて、それに対するたくさんの思いがあることを知った。新しく変わろうとすることも大切だけれど、一方で過去の事実を知ることも重要であること、そしてまた興味深いということが分かった。



「友情」を読んで

2年 建築学科
森木史子

浜辺に好きな人の名前を書き、波がそれを消さなければ好きな人は自分のものと思うあなたを純粋だと思った。また、石を海へ投げて3つ以上飛んだら好きな人は自分と結婚するのだと思い、失敗したら何度も繰り返しているあなたを自己中心的だとも思った。

どんどん有名になっていく親友へのあなたの嫉妬心。あなたの恋を応援してくれる親友への感謝の気持ち。好きな人と親友の仲を知った時のあなたの怒り。私もそうだとは言えないが共感を持てる。

このようなことを経験したことがない私はうまく感想を書くことができない。親友の気持ちも好きな人の気持ちも最後の手紙を見るまで私は全くわからなかつた。親友はあなたを応援しているとばかり思っていた。あなたの好きな人が親友のことを好きだと推察できなかつた。鈍感である。あなたの立場になったことがないから無理もない。しかし、私はあなたの気持ちに共感が持てると書いた。なぜだろう。深く考えなかつたが、素直にそう思った。それは友情に対する思いだつた。最初、私は恋愛について考えていた。だから感想が書けないと思っていた。しかし、友情を考えてみると共感を持てる。

友人はなくてはならない。励まし合つたり、時にはライバルにもなる。良くも悪くも大きな影響を受ける。支え合い、共に歩んでいく。あなたの親友もあなたを応援し、励ましていた。とても素晴らしい人だと思う。恋をしても、どんなに素晴らしい恋人ができても、その話を聞いてくれたり励ましてくれる友人がいなければとても悲しい。たとえあなたのような結果になったとしても友人は必要だ。

私たちは学校で多くの友人と出会う。決して学校は勉強するだけの所ではない。多くの友人を得て心を成長させる所だ。勉強ばかりになると、友人ではなくただのライバルがたくさんできる。少しでも良い学校に進学しようとする。それは良いことかもしれない。しかし、ふと悲しくなつて励ましてくれる友人がいなかつたら……。これほど悲しいものはない。

ふと、手に取つて読んだこの本は、とても身近に感じられた。それだけにかえつて感想が書きづらかつた。けれども、友人の大切さを改めて実感した。友情という言葉が私の心に大きく残つた。

審査を終えて

今年も昨年に引き続いて2度目の読書感想文コンクールが実施されました。実施方法及び読書感想文コンクール用対象作品等については、別頁で説明がなされていますので、ここでは審査委員の一人として今回の選考会に立ち会い、感じたことをいささか述べさせてもらいます。

まず選考方法について記してみようと思います。このコンクールを実施するにあたり教官側から選考委員として、一般科より4名、専門科より2名、それに新谷図書館長の合計7名が選出され、この委員会により最終審査が行なわれました。今年は、第1次審査を、学生より提出された感想文をクラス毎に担任教官の手によって行なってもらうよう協力を要請しました。ここで、クラス毎に選ばれた5篇から10篇の優秀作品を2次審査用のノミネート作品としました。この段階で、教官の選考委員を3チームに分けました。1年生のノミネート作品を国語科の2名の教官で、2年生以上のノミネート作品を、図書館長と国語科を除く残りの選考委員で2名ずつの2チームに分かれ、それぞれ3次審査用の作品選考を行ないました。ここで残った作品が、全部で40篇でした。これを学年、氏名等を全て伏せた上で、選考委員全員により、1作品につき5点満点で、相対評価法で得点をつけ、7名の選考委員の持ち点を合計した35点満点で順位を決めるという方法がとられました。また合計得点が同点の場合、5点、4点評価の多いものを優先するという取り決めもあわせてしました。

10月29日の放課後、選考委員全員出席のもと、審査が行なわれ、最終的に優秀作品から佳作まで10篇を決定しました。

ここでは、最優秀賞・優秀賞に輝いた上位4作品について審査所感を具体的に述べてみます。

最優秀賞に選ばれた2Aの坂上美穂さんの作品は、山田詠美という今最も注目されている女性作家の一人の作品『晩年の子供』について、その中の主人公に自分をダブらせた軽快なタッチで、しかも手馴れた文章表現が大部分の審査委員の目にとまり、35点満点中31点という高得点で、審議を待つことなく即決しました。

次に優秀賞に選ばれた1Aの吉富寛子さん、2Cの江崎奈都子さん、2Aの前岡いづみさんの3名の作品はいずれも総合得点が29点で、初めは優秀賞は2名の予定で選考を進めていたのですが、3作品とも甲乙つけ難い出来映えでしたので、今回は3名とも優秀賞に決まったしたいです。

まず1Aの吉富さんの作品は伊藤佐千夫の『野菊の墓』についての感想文でしたが、今時の学生にこのような純愛物語が、果たしてどれほどの共感を抱かせるのか疑問視していた私の予想を裏切るような、会心の出来映えでした。次に2Cの江崎さんの、アンネ・フランクの『アンネの

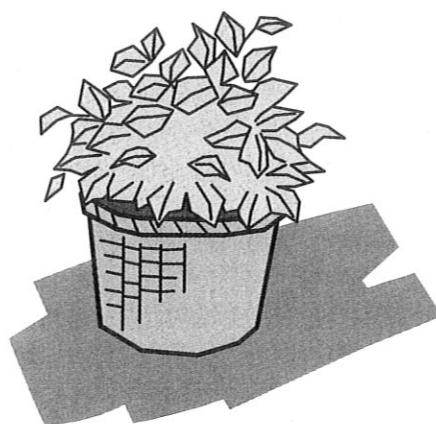
日記』の感想文では、ユダヤ人迫害という、呪わしい歴史事象をアンネという少女の感動的な瑞々しい筆致で記された著名な作品を、表面的な同情や陳腐な表現に陥ることなく、江崎さんの淡々とした文章の中にも、彼女独自の歴史観で裏付けられた、芯のある主張が上手く込められていたように思います。それから2Aの前岡さんの、高樹のぶ子著『光抱く友よ』についての感想文は、この作品を読んだ後の、高揚した感情を、多少の抑制をきかせながらも、テンポのある文体で、伸び伸びとした筆致で書き記されていたのが、審査委員に好感を抱かせたものと思います。

最後に、今回の感想文の審査を終えて感じたことを若干述べてみます。入賞を果たした10作品のみならず、惜しくも選外となった作品も含めて言えることですが、なかなか読み応えのある秀作が多かったように思います。有明高専の学生の秘められた資質を垣間見たような気がしました。また、昨年に比して、感想文の対象となった作品が多岐にわたっており、審査の作業に単調さが避けられ、楽しみながら読み進めることができました。

ただ、1・2年生が全員に近い提出状況に較べて、3年生以上の応募がほとんどなく、それ故に、入賞作品の学生が1・2年生だけに限られてしまったのは、少し寂しく思います。

このような読書感想文コンクールが、早く全校学生の取り組みになる日が来ることを願わずにはいられません。

(一般科 焼山 廣志)



平成8年度 読書感想文コンクール推薦図書 (50冊の本)

著者名	書名	出版社名等	著者名	書名	出版社名等
1 夏目漱石	こころ	文庫	27 チャールズ・ディケンズ	クリスマスキャロル	文庫
2 "	草枕	"	28 アンドレ・ジイド	狭き門	"
3 森鷗外	高瀬舟	"	29 シエイクスピア	ロメオとジュリエット	"
4 武者小路実篤	友情	"	30 トマス・マン	トニオ・クレーゲル	"
5 伊藤左千夫	野菊の墓	"	31 ジョン・ウェブスター	あしながおじさん	"
6 芥川龍之介	鼻	"	32 アンネ・フランク	アンネの日記	"
7 "	地獄変	"	33 ジョージ・オーウェル	動物農場	"
8 川端康成	伊豆の踊子	"	34 中川雅子	見知らぬわが町	葦書房
9 梶井基次郎	檸檬	"	35 大平健	やさしさの精神病理	岩波新書
10 太宰治	斜陽	"	36 輝峻淑子	豊かさとは何か	"
11 大岡昇平	野火	"	37 ロバート・フルザム	人生に必要な知恵すべて 幼稚園の砂場で学んだ	河出書房
12 遠藤周作	沈黙	"	38 湯川秀樹	旅人(湯川秀樹自伝)	文庫
13 有島武郎	生まれ出づる悩み	"	39 フアラデー	ロウソクの科学	"
14 井伏鱒二	黒い雨	"	40 向後元彦	緑の冒険	岩波新書
15 井上靖	あすなろ物語	"	41 柳田邦男	恐怖の2時間18分	文春文庫
16 "	天平の甍	"	42 村上陽一郎	科学者とは何か	新潮選書
17 島崎藤村	破戒	"	43 中谷宇吉郎	科学の方法	岩波選書
18 竹山道雄	ビルマの豊饒	"	44 木村哲人	発明戦争	筑摩書房
19 高野悦子	二十歳の原点	"	45 丹羽保次郎	電気をひらいた人々	東京電大出版
20 高樹のぶ子	光抱く友よ	"	46 水島宣彦	エレクトロニクスの開拓者たち	電子情報通信
21 三島由紀夫	潮騒	"	47 菊池誠	日本の半導体四〇年	中央公論社
22 幸田文	流れる	"	48 村井純	インターネット	岩波新書
23 有吉佐和子	華岡青洲の妻	"	49 吉田洋一	零の発見	岩波新書
24 堀辰雄	風立ちぬ	"	50 西岡常一ほか	法隆寺を支えた木	NHKブックス
25 山田詠美	晩年の子供	"			
26 中勘助	銀の匙	"			

全国図書館大会に参加して

司書 宮本美沙子

先日、「大分の風 おもいをのせて全国へ」のテーマをかかげた第82回全国図書館大会が別府市で開催されました。全国の学校図書館、地域図書館の関係者が集まり互いに情報交換をする有益な会議でした。特に全国の高等図書館の集まりでは同じ悩みや苦労を抱えながらも、よりよい図書館を目指して努力している図書館員の実情が報告されて、大いに刺激を受けました。全国の高専にLANが設置され、コンピュータを用いた管理や電子情報ネットワークによる情報提供が可能になり、教育、研究における図書

館の果たす役割が格段に大きくなってきました。このような図書館をめぐる新しい動きに対応しつつ、今後とも学生が気軽に利用できて、新しい発見の場となるために、レファレンスサービスの向上など、魅力ある図書館づくりに努力したいと思います。

今回の大会に図書館長と共に参加することができ大いに心強く、他高専の方との交流もでき、こういう機会を与えてくださった方々に感謝します。

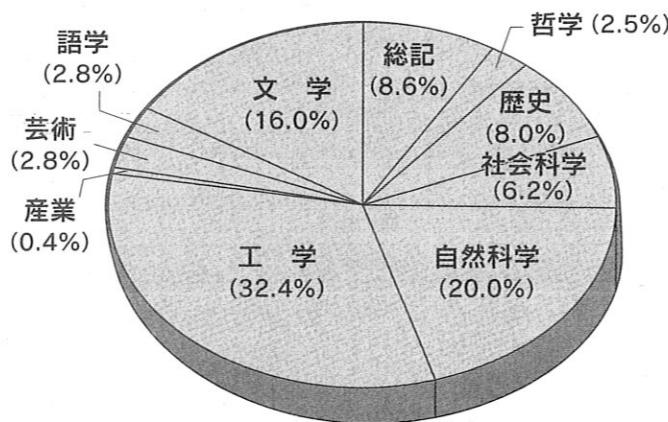
図書館統計

1. 藏書統計（平成8年3月31日現在）

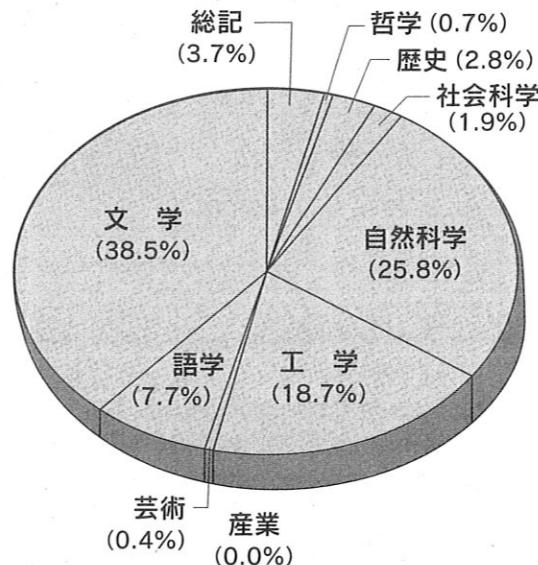
蔵書構成

分類		0 0 0	1 0 0	2 0 0	3 0 0	4 0 0	5 0 0	6 0 0	7 0 0	8 0 0	9 0 0	合計
		総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	工学	産業	芸術	語学	文学	
図書の冊数	洋	264	48	198	134	1,852	1,344	3	28	551	2,769	7,191
	和	5,259	1,524	4,909	3,798	12,204	19,873	271	1,919	1,698	9,818	61,273
	計	5,523	1,572	5,107	3,932	14,056	21,217	274	1,947	2,249	12,587	68,464
雑誌の種類数	洋	3	1	9	1	2	33	0	0	3	2	54
	和	16	2	3	7	18	74	0	15	4	12	151
	計	19	3	12	8	20	107	0	15	7	14	205

分類別蔵書割合「和書」



分類別蔵書割合「洋書」



2. 平成7年度利用状況

開館日数 240日

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
入館者数	1,610	3,169	4,729	4,336	2,357	4,152	3,158	2,299	2,546	3,078	3,710	1,548	36,692
貸出冊数	296	821	792	745	151	489	579	481	420	728	580	161	6,243

夜間（午後5～8時）の入館者数および貸出冊数の占める割合はそれぞれ約25%、26%である。

3. 5年間利用統計

分類別貸出状況

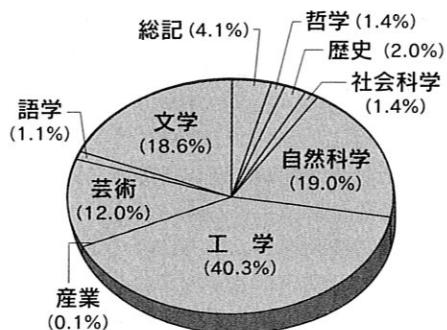
年 度	総 記	哲 学	歴 史	社 会	自 然	工 学	産 業	芸 術	語 学	文 学	合 计
平成3年度	138	25	53	32	662	841	2	607	18	230	2,608
平成4年度	140	11	27	30	607	908	0	260	23	263	2,269
平成5年度	160	51	50	33	763	1,599	2	312	24	530	3,524
平成6年度	143	60	49	47	706	1,979	8	390	50	815	4,247
平成7年度	197	118	195	128	851	2,289	15	696	86	1,668	6,243

利用状況

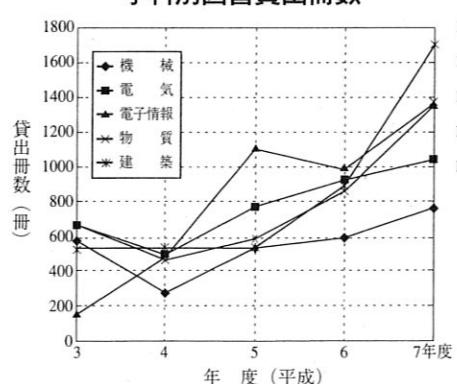
年 度	学 生 数	開 館 日 数	入 館 者 数 総 計	1 日 当 り 入 館 者 数	帶 出 冊 数 総 計	1 日 当 り 帶 出 冊 数	1 人 当 り 帶 出 冊 数
平成3年度	998	293	9,817	34	2,608	9	3
平成4年度	991	286	7,191	25	2,269	8	2
平成5年度	1,018	245	9,715	40	3,524	14	3
平成6年度	1,015	238	34,987	147	4,247	18	4
平成7年度	1,037	240	36,692	152	6,243	26	6

分類別貸出冊数割合

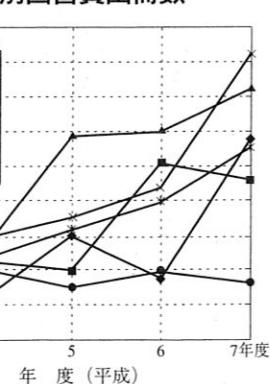
(平成3~7年度平均)



学科別図書貸出冊数

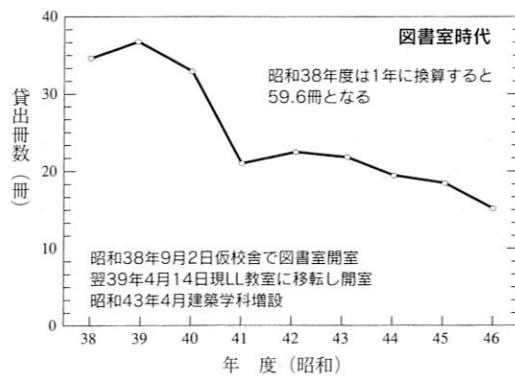


学年別図書貸出冊数

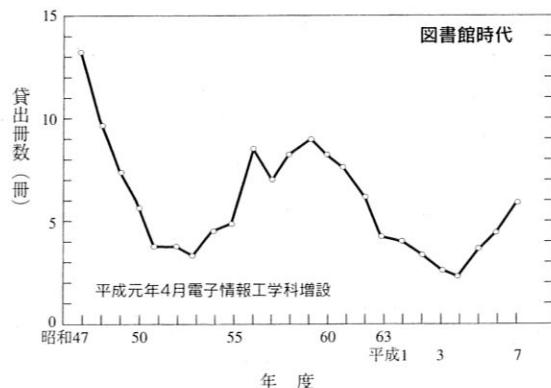


4. 創設時からの一人当たり貸出冊数の推移

学生一人当たり年間貸出冊数



学生一人当たり年間貸出冊数



図書館勤務17年の思い出

図書係長 宮川喜己

17年間の思い出を1ページにまとめることなど至難のことであるが、定年を来年3月に控え、この度、新谷先生からの強い勧めもあり、私のたない一文を“図書館だより”に掲載させて頂く機会を与えていただきますことを心より感謝するとともに大変光栄に思います。

さて、私は本校創立の昭和38年からの勤務（34年間）ですから丁度その半分の17年間を図書館で過ごしたことになります。思い起こせば昭和51年、当時の庶務課長（大宅課長）から司書の講習を受講するようにとのお話があり、これまで会計課に永くたため、図書館については何の知識もない自分に何で!!と自分の耳を疑った。しかし、これも自分に与えられた使命（試練）であろうと、生意気にもお引き受けしたのが図書館との関わりの始まりであった。最初に頂いた辞令が“係長心得”でいささか心もとなない図書館勤務のスタートであった。この年の8月、上司の暖かい計らいで別府で行われた司書の講習を受講することとなった。図書館は私を含めて3名と少ない人数なので、ここで更に自分が抜けるのは係長になりたての自分にとっては、係員に大変申し訳なく心苦しかったが、受講中に宮本さん（係員）から「暑い中大変ご苦労様頑張って下さい」との励ましの手紙を頂いたときは、身にしみて嬉しく救われる思いであった。講習は夏最盛の時期で大変きつかったが、それだけに多くの楽しみと多くの友達と出会うチャンスに恵まれ、今でも親しいお付き合いが続いている。

講習での1番の思い出は、講義が終わって食事のあととの仲間との“書誌学”（少々Hな話）の勉強は大変楽しく、今でも時々思い出しては一人苦笑することもあります。当時の模様を簡単に紹介すると、講師は金沢先生（天草で中学の校長をされていた方）で、先生の提案で昼間の疲れを癒すため、これから社会勉強をしようではないかと言うことになり、そこで司書講習にふさわしい“書誌学”（書誌学の語意は受講して初めて知った。）の勉強をすることになった。「次の問いに答えなさい」問1。「下・下判る人は手を挙げなさいと先生から促されたが、勿論、誰一人として答えることはできなかった。以後、講義は延々と続き爆笑の渦となり夜の更けるのも忘れ先生の講義に聴き入った。図書館ではこれといって誇れる業績を残すことはできなかつたが、これまで歴代の諸先輩が築き上げてくれた財産（伝統）を娘い漬すことに終始したが、自分にとって唯一誇れるものがあるとすれば、図書館の電算化を曲がりなりにも形あるものにできたことである。当時、図書館にもようやく電算化の機運が高まりつつあるなか、本校でも図書館の電算化は避けて通れない問題であろうとの結論となり電算化の第一歩を踏み出すことになった。ところが、スタートから大きな壁

にぶち当たった。当時、無い無いづくしの図書館予算をやり繰りしながらの関係（委員会等）への説得は難渋を極め、説得の難しさと産みの苦しみをいやと言う程思い知られた。とくに、我々係員は電算機については、まったくの素人のため電算機導入のための関係係との折衝では笑うに笑えないエピソードも生まれた。しかし周囲の冷ややかな目（係員3人で何が出来る）に少々反発する反骨心も手伝い電算化に踏み切ることができた。これも当時の林事務部長、木佐木図書館長の支援なくしては到底無し得なかつたであろうし、また、宮本さん、戸上さんには連日残業・残業で大変ご苦労をかけたが、嫌な顔一つせず頑張ってくれた。今となつては感謝あるのみである。

私はこれまで8代の図書館長、同じく8代の庶務課長にお仕えしたことになる。お仕えしたそれの方との出会いのなかで、我が人生の指針となる教訓、助言、苦言等々心に残る示唆をいたしました。なかでも、木佐木館長の一言は今でも鮮やかに思い出される。その一言とは、これから図書館の電算化を進めようと言う時期、なかなか腰をあげない自分に業を以てした木佐木館長が、図書館の電算化はこれから推進すべき課題で「やるも見識・やらぬも見識」この一言はその後図書館の電算化の展望を開く大きなきっかけとなつた。要は失敗を恐れることなく機を見て事を成すことの大切さを身を持って教えていた一言で、今でも心に残つている。その後、更に電算化を進めるうえで宮川先生の存在を忘ることはできない。紙面の都合で細かくは紹介できないが、図書館長として1期2年の短いお付き合いではあったが、その誠実な人柄と仕事にかける情熱は、歴代館長でも特筆に値するもので、何事にも真摯に取り組まれ、我々係員のよき理解者として多くのことを教わつた。

近年、高専図書館においてもこれから大きな変革を迫られる時期にさしかかったと言える。それは、インターネットに代表される電子メディアの出現により情報流通等々益々多様化が予想されるなか、幾多の難問を残し退官することは、誠に申し訳ないことではあるが、後任の係長さんには、これまで自分がなし得なかつた事を逐一解決していくことを期待するとともに、本校図書館が学生並びに教職員の知識の源泉として、益々活気に満ちた素晴らしい図書館に生まれ変わることを念願します。新谷先生（館長）には大変お世話になり、ご恩に報いることはできなかつたが、先生には、これから本校図書館の舵とり役として大いに活躍されますことを祈念します。これまで多くの方々に支えられながら職務に専念できたことを深く感謝しつつ筆を置くことにします。

図・書・係・か・ら

INFORMATION

1階新聞コーナーが移動しました

新聞閲覧については、これまで1階ロビーで利用していただいていましたが、閲覧台が相当スペースを取るため、夏休み期間（8月末日）を利用して2階雑誌コーナー横（2階カウンター向側）に場所を移しました。

身近な情報源として多くの学生諸君の利用をお待ちしています。

館内への飲食物の持ち込みはやめよう

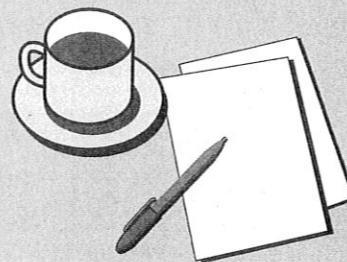
最近、閲覧室に缶ジュース、牛乳等の飲食物を隠して持ち込み飲食している学生が見受けられます。

飲食物の館内持ち込みは堅く禁止しています。絶対持ち込まないよう学生諸君のご協力をよろしくお願いします。

ビデオ編集機が導入されました

図書館では、最新鋭のビデオ編集機を購入し、視聴覚室に備え付けました。

教官の研究に、また学生のクラブ活動、各種行事、体育祭等のビデオ編集等大いにご利用下さい。ただし、学生個人としての利用は許可していませんが、指導教官の承認があれば利用できます。



スタッフ紹介

● 平成8年度 図書館運営委員

図書館長	新谷 肇一	(建築学科)
教務主事	田口 紘一	(機械工学科)
運営委員	川崎 義則	(機械工学科)
"	辻 一夫	(電気工学科)
"	森 紳太郎	(電子情報工学科)
"	三浦 博史	(物質工学科)
"	小野 聰子	(建築学科)
"	焼山 廣志	(一般科目(文))
"	塚本 祐右	(〃(理))
"	倉狩不二男	(庶務課長)

● 平成8年度 図書館俱楽部委員

顧問教官	焼山 廣志	(一般科目)
編集委員長	橋口 悟	(電気工学科3年)
委員	西原 佐知	(電子情報工学科3年)
"	森木 史子	(建築学科2年)
"	長尾 一也	(機械工学科1年)
"	西田 智美	(物質工学科1年)
"	原田由加里	(〃)

● 事務部

庶務課長	倉狩不二男
図書係長	宮川 喜己
司書	宮本美沙子
"	戸上 清子

● 夜間開館職員

事務補佐員	福山 円次
"	四ヶ所靖子

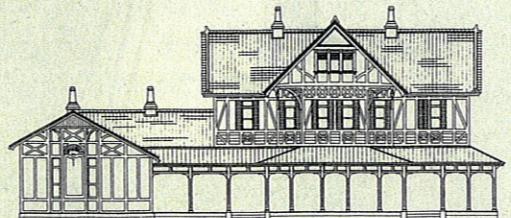
郷土の文化財——三井港俱楽部

明治41年(棟札) 大牟田市西港町

明治41年4月に開港した三池港（開港式は翌42年4月25日）に入港した船員の慰安や休息を目的として、三井港俱楽部は清水組（現在の清水建設株）の設計施工で建設されました。明治40年7月12日に請負金額34,463円19銭で契約を交わし、8月10日起工、翌明治41年2月16日上棟、10月22日に開館式を行いました。

木造2階建、屋根裏部屋付、切妻造、桟瓦葺、建築面積665.33m²の洋風建築です。外壁は下見板張にハーフチンバーで、ペンキを塗って仕上げています。

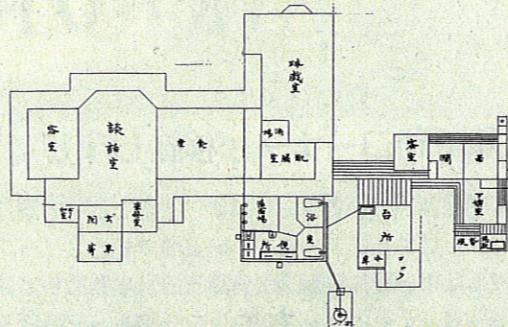
1階には食堂・応接室・球戯室（ビリヤード）等があり、2階には寝室がありました。屋根裏はボーイ部屋に使われていたと言われています。各部屋にはマントルピースを備え付け、1階では部屋毎にデザインや大きさが異なります。また、天井や腰板も部屋毎に異なった意匠を探っています。



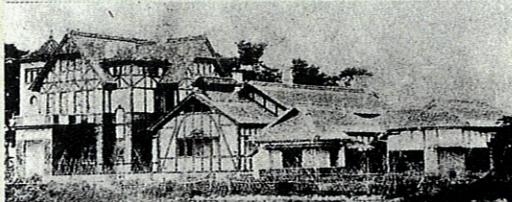
背面図



食 堂



平面図略図 明治41年頃（三井鉱山三池事業所所蔵）



正面全景 明治41年頃（三井港俱楽部所蔵）

建設以来約90年が経過し、現在までに様々な改修が行われてきましたが、当初の姿を概ね今日に伝えています。但し、昭和62年に宴会場（旧球戯室）を広げたこと、和館を崩しそこにプレファブを建てたことが大きな変更です。この改修時までは洋館と和館が並び、両者が廊下で繋がった和洋館並立形式だったことになります。この形式は明治期の上流階級の住宅に用いられたもので、柳川市の立花邸（御花）や北九州市の旧松本邸でも採用されています。

当俱楽部は文化財には指定されてませんが、大牟田市内に残る明治の洋風建築として、大牟田市の近代化を物語る建築として、清水組の九州における初期の建築として貴重であり、地域の文化財として重要なです。

(建築学科 松岡 高弘)

図書館が学生、教職員にとって、もっと身近かな施設となるためのパイプ役として、昨年、新たに発刊された「有明高専図書館報」の第2号をお届けします。学生編集委員（顧問：焼山教官）によって精力的に発行されている「図書館俱楽部」とともに、図書館情報誌として、活用していただけます。

この第2号も創刊号の編集方針を基本的に踏襲して作りました。メインは昨年同様、読書感想文コンクール入賞作品の掲載です。応募作品370編の中から選ばれた学友の優秀作品10編を一挙掲載しました。じっくり読んで、今後の励みにして頂きたい。

創刊号では、高松校長の「創刊にあたって」や宮川図書館長の「本校図書館について」など本校図書館のこれまでの歩みや、今後の課題などについての本格的な論考が掲載されましたので、今回はもう少し軽く読めるような座談会特集を企画し、「図書館俱楽部」編集委員の学生に集まつていただき、利用する学生の立場からざっくばらんな意見を出してもらつた。是非とも、今後の図書館運営に生かして行きたい。また、来年3月に定年退官を迎える宮川係長に「図書館勤務17年の思い出」を綴つてもらつた。

編集後記

